



購讀料 廣告料 發行所 印刷所 訂價表

教育者としての懺悔 (一)

横濱市富士見高等女学校長 澁谷近藏

世相の悪化

世相の悪化は、非常時日本に於ける、現在の我國は去らなければ、現在の我國は...

世相の悪化は、非常時日本に於ける、現在の我國は去らなければ、現在の我國は...

世相の悪化は、非常時日本に於ける、現在の我國は去らなければ、現在の我國は...

世相の悪化

世相の悪化は、非常時日本に於ける、現在の我國は去らなければ、現在の我國は...

世相の悪化は、非常時日本に於ける、現在の我國は去らなければ、現在の我國は...

世相の悪化は、非常時日本に於ける、現在の我國は去らなければ、現在の我國は...

實業補習教育四拾周年記念大會

主催 神奈川縣 神奈川縣教育會

實業補習教育四拾周年記念大會 主催 神奈川縣 神奈川縣教育會

朝野の教育關係者及諸名士來賓

- 朝野の教育關係者及諸名士來賓 横濱市女子商業學校長 唯野眞琴君...

第五回女教員隨錄

第五回女教員隨錄 横濱市女教員會は會員相互の親睦をはかることを目標として...

横濱市女教員會は會員相互の親睦をはかることを目標として...

横濱市女教員會は會員相互の親睦をはかることを目標として...

横濱市女教員會は會員相互の親睦をはかることを目標として...

横濱市女教員會は會員相互の親睦をはかることを目標として...

横濱市女教員會は會員相互の親睦をはかることを目標として...

横濱市女教員會は會員相互の親睦をはかることを目標として...

横濱市女教員會は會員相互の親睦をはかることを目標として...

横濱市女教員會は會員相互の親睦をはかることを目標として...

横濱市女教員會は會員相互の親睦をはかることを目標として...

横濱市女教員會は會員相互の親睦をはかることを目標として...

横濱市女教員會は會員相互の親睦をはかることを目標として...



近ごろ教育草紙

虫喰ばなし

(見夢市)

日本の言ひ、日本主義といふ...

方々でありませう。即ち曰く。最...

た大へんな誤り。失敗であつた...

「血と土だ」。何事もその確かな...

〇所で、教育行政は日本を眞の...

〇反対運動の皆様たちは何をな...

日本人として日本を安くも高く...

〇〇大将の言はるる事に感激し...

住宅を憚り、名を假りに...

富の分配 白幡一燈

が彼の良心はそれを許さな...

苦勞は明日の食糧である。...

見守つてゐる人々にして其賦...

この学校には普通學級と臨海學...

普通學級の所は市内小學校と大...

校舎を二營する。...

校舎の東南部に...

校舎の東南部に...

紹介してみたい

縣下學校の様々

世界に誇る幼時教育の殿堂!!

間門小學校

横濱市電の 間門行に乗つて...

日本人としての眞意義

篠原生

圓滿なる家庭を作るには家族の信仰を一にする事にある。家庭的信仰を起すの動機は全く國家的信仰を實現するにある。所謂道念の發生は家庭的信仰に基き、信仰の目標は國體に存する。

今日日に日に激化する思想國難の秋、赤化唯物思想の浸潤は現代の若人の上に遠慮會釋もなく進んで来る。かゝる場合普通常識としてその思想は常識以上の智識で固めたものであるから尙の立つべきものではない。これこそ精神的解決を要する時である。この精神的大精神によつて處理すべきである。

教育勸語の御趣旨に基き道念の修練、思へば人類最上の理性啓蒙の課題である。けれどもこれには善智識を要する。畏れながら勸教を拜する上に於てこれを支那思想によつてすれば徒らに形式に捉はれ其の生命たる日本精神を見出す事が出来なくなるのであつて、これを拜する者は先づ第一自己の頭腦に先入された外來思想を清算すべきである。

て神明を愛した時神明日本の愛國民が出来来る(釋智道人著日本國體の眞理に依る)

然りて假面や體裁や神祕の衣を飾り麗きつぱりと脱ぎ捨て、神明日本の姿にかへり隨神の道法に則つて勸教の大精神を體得すれば期せずして國體統一一家圓滿の國家的信仰が實現されるのである。

次に私は私の恩師釋智道人の言葉を引いて讀者の自省を促さんとするものである。諸君は諸君の現に住させ給ふ心境が、次の四種類に別けた日本の何れに屬されるか、それを諸君の良心に訴へて自裁して戴き度い。

主として農村に於ける

校外生活指導管見(二)

神奈川縣都筑郡都田小學校

齋藤哲

一、部活を單位として、児童の自治相互修養をなすこと。二、學校内の五部の活動を家庭に迄延長し實行せしむること。三、神佛に對する敬虔の念を盛にし、同時に教育の不徹底なる部分を補足し、やがて自治少年團の前程ともする。

四節 組織及び名稱 本校外生活指導は「都田村少年(少女)會」とし、活動單位を部落におき次の名稱をなす。一、川和部落：川和少年(少女)會。二、佐江戸部落：佐江戸少年(少女)會。三、池邊東北部落：池邊東北少年(少女)會。四、池邊南西部落：池邊南西少年(少女)會。五、川向部落：川向少年(少女)會。六、東方部落：東方少年(少女)會。

が、施設の種類に依つて佛閣、立志の家、遺跡、空地その他をもつて行つてゐる一定してゐない。而し施設の全部は部落の範圍を出でない。各部落の神社を擧ぐれば次の如し。

川和部落：八幡宮。佐江戸部落：杉山神社。池邊東北部落：杉山神社。川向部落：稻荷神社。東方部落：天満宮。折本部落：淡島神社。大熊部落：杉山神社。

本少年會は原則として「自治」を主體としてゐるが、補導と云ふ意味に於て、次の如き指導者をもつて指導してゐる。

一、學校職員 本少年會は學校職員に補導をもつて、最も大いなる力を盡してゐる。それは學校の延長だからである。各職員はそれ／＼各部落を擔任して主として其の受持部落の少年會の補導に當つてゐる。

二、その他、各神職、宮世話人、各學務委員、父兄、有志等の熱心なる助力を得てゐる。

七節 施設要項 一、部會決議事項の實行徹底に關するもの。二、校外實踐に關するもの。三、少年會行事の度毎に會長班長等率先實行に勉むる。四、遊びの指導。五、各部に於て、児童の集合し易く通常遊び場となる場所。六、高學年役員又は當番が出張して、良い遊びの指導をなす。

三、集合登校 出席部の行事として、時間勵行の手段として行ふ。各部の適當な場所に集合高學年児童教師の指揮に依り二列に整列して登校。四、神社境内の清掃 毎月一日、十五日の二回早朝登校前に行ふ。四年以上の児童全部参加せしめ、大體次の順序に依り行ふ。

五、節 施設の場所 活動の中心になる場所は、各部落の神社を原則としてゐる。

參拜。清掃後手足を清潔にし、服装を整頓して神前集合。參拜、解散。五、神前行事 成積物の奉納、獻殺。建國唱歌。部會決議事項の申合せ。六、休暇利用の行事 納涼學藝會。道路掃除並修理。早朝、除草等も同時に行ふ。體育會。遠足會。水泳練習會。勉強會。夏季學習帳等に就いて。キャンプ生活。敬神崇祖日。無格神、忠魂碑、墓地等の清掃參拜。日光浴。時事問題等について。

第二章 校外生活指導 一節 校外生活指導の輪廓 校外指導は今更新しい言葉ではない。今迄も相當重んぜられ、實行されて來たのである。然し、校外生活指導の「生活」には相當新しい主張が流れて居る事が看取される。

從來、教育と云へば、學校の教育、それも教壇に於ける教授のみを指すの一般的思考上の偏見が著しい。現代の如き教授をのみ想起する教育は、廣い意味の教育に對する極々狹義の教育であつて、ヘルバート等に依つて呼ばれた知識偏重の、十八世紀の教育であつて、現代の如く、文化の進展一日として止る事を知らない時代にあつては、既に過去の文化的產物としての一價値にしか過ぎないものである。教育も時代に伴ひ、ねばならぬ事は論を待たぬ。廣い意味の教育とは何か？ 凡そ教育と名づくべきものに於て、教育するもの「教育されるもの」の「教育」に用ふるもの。この三者は否定出來まい。此の三者は教育なる理念構成の三因子であつて、又互に相離れず、互に關係にあり、恰も鼎の三脚の如き立場にあるのである。(つづく)

滿洲 旅行の雜感(二) 村尾留吉 單に之を威壓したならば益々其心の底に底知れぬ禍根を刻みつける事は火を見よるよりも明らかである。寧ろ懇に導き教ふる事によつて、彼等の満足を買ひ、感謝の念を増さしむる様努めなければならぬと信するものである。併し無教育なる彼等の中には其意を諒とせざるものも無論あるに相違ないが、それ等は「一々吾々の手によつて適當に導いてやるべき」と思ふのである。威武により強て之を抑壓せんか必ず其反動を見るものと思ふ。現在我軍隊が匪賊或は無頼の徒を懲らしめる事によつて、彼等が正義につくことを得、其日を安全に且つ將來の希望に満たされつゝあることを感謝しつゝ、ある如く其邊の消息を物語るものであると信する。

現在彼等の衣食住は、全く言語に絶する程低級にあるはれるものである。我労働者が彼等と共に其仕事を進めんとするならば、十二分の確信と覺悟がなければ到底出來得るものではない。勿論其國、其人として彼等を指導誘致するの立場に立つべきものであるにもせよ、かゝる情態を味はつて始めて其真味を穿つものであるから、一度は其境地に踏み入ることが、最も必要なる事柄である。彼地開發指導の重大なる任務を負ふものは、どうしても此の種の體驗を経て然る後に自己の欲する其道に進んで行かなければならぬ。妻も子も家もなき漂流孤獨のものは、全く憐むべき同情すべき人間といはなければならぬ。冬季に於て働か得ぬ彼等は此の半ケ年に一年の生活費を稼がなければならぬのみならず、人間人間として生きんとすれば、妻子を養ふの資格者として生きんとを求めれば尙更である。朝は兎に角夜の明けを待つて働かぬから、少くも四時頃には仕事場に出て夜は少くも七時八時頃迄も働き続ける。同情すべき人類なると同時に、又一方模範的にも考へらるゝ性格である。

將來の發展地 申途もなく日本の生命線たる滿洲の事であるから、吾人は公私共に其發展向上を企てなければならぬのである。併し其の道の爲努力して居る譯ではあるが、土地は廣く、外國ではあるし自儘に勝手な策も施せず併し新しい國として、目醒めた國土として、東洋に先んずべきものとして、面目を立てなければならぬから一意専心國民の總努力によるなければならぬ時である。勿論五年十年の短時日では到底其目的の達成は期し得られぬ。個人々々の勝手な進退は禁物である。宜しく世界に立脚し、東洋の平和を根底としてなすべきの問題であつて、單なる偏見によつて事をなすべきものでないことは勿論である。相率ひ相携へての發展向上其處に國として、人としての意義が成立つものであることを信する。

以下項を追つて視察の順序により私の見聞した事柄について書いて見度と思ふ。

お断り 前號號壇の締切期日は十一月二十日迄

相談 武史

金澤文庫印の研究(續)

關靖

一、火前印と火後印
『經籍訪古志』を讀むと、再三文庫火前印といふ語を使用してあることを發見する。

『荀子二十卷。宗聖大字本、求古樓藏。』
每卷有金澤文庫印。印文肥寬異所經見。殆文庫火前印也。

『荀子二十卷。宗聖大字本、求古樓藏。』
每卷有金澤文庫火前印。其寸法與金澤文庫火前印甚近似。

『その時翁(中井啓所氏)は義子新家孝正氏の座敷に自分を延きたるを、文庫の印を模したるものを出して示された。

『十三日、丁卯、右大將家法華堂前人家、丁卯、陸奥掃部助幸在其中。』
とある。他は文永七年で、群書類に於ては、同書成書以前に

『金澤文庫の創立者たる北條實時が、度々火災に逢つたといふことは事實である。確實な記録に残されてゐるものが二つある。一は寶治元年で、吾妻鏡の同年正月の條に、

予本句勘合書寫之間、還又以件本重令書寫者也、越州刺史。』
とある。越州刺史は越後守北條實時の事である。

然し第二回は文永七年であるので、實時が清原隆家から教を受け始めたのが、建長五年頃から十八年の時を経てゐる。

『その時翁(中井啓所氏)は義子新家孝正氏の座敷に自分を延きたるを、文庫の印を模したるものを出して示された。』

『十三日、丁卯、右大將家法華堂前人家、丁卯、陸奥掃部助幸在其中。』
とある。他は文永七年で、群書類に於ては、同書成書以前に

『金澤文庫の創立者たる北條實時が、度々火災に逢つたといふことは事實である。確實な記録に残されてゐるものが二つある。一は寶治元年で、吾妻鏡の同年正月の條に、

『金澤谷殿御事に愚老養子之聞禁忌事、富士宮司か申候なるは百廿ヶ日候子息等は不可其禪之由同合申之旨今朝召儀久長崎左衛門入道直合申候云々然者御禁忌不可有之儀伊豫國守護土岐左近大夫被殺害之由事候實御沙汰候體にて候とも罪名をも付られ(後缺)』

この消息中には正中の變のことがあるから、正中元年九月頃の消息であることが分る。

然らばこの説は何ん所から出たのかといふと、恐らく金澤文庫印に色々の種類があり、線の細いものや太いものがあるのと、實時が一度ならず火災に逢つて居る所から、この二つを結付けて火前と火後に區別したものである。

『その時翁(中井啓所氏)は義子新家孝正氏の座敷に自分を延きたるを、文庫の印を模したるものを出して示された。』

『十三日、丁卯、右大將家法華堂前人家、丁卯、陸奥掃部助幸在其中。』
とある。他は文永七年で、群書類に於ては、同書成書以前に

『金澤文庫印と火後印とてはおなじ』
と記してゐるのは尤もである。

然らばこの説は何ん所から出たのかといふと、恐らく金澤文庫印に色々の種類があり、線の細いものや太いものがあるのと、實時が一度ならず火災に逢つて居る所から、この二つを結付けて火前と火後に區別したものである。

『その時翁(中井啓所氏)は義子新家孝正氏の座敷に自分を延きたるを、文庫の印を模したるものを出して示された。』

『十三日、丁卯、右大將家法華堂前人家、丁卯、陸奥掃部助幸在其中。』
とある。他は文永七年で、群書類に於ては、同書成書以前に

『金澤文庫の創立者たる北條實時が、度々火災に逢つたといふことは事實である。確實な記録に残されてゐるものが二つある。一は寶治元年で、吾妻鏡の同年正月の條に、

少 小説 少

修 二

秋本理貴作

私は、山根刑事さんが歸つてしまはれると、ひとりぐりで眼陰に涙が盛り上つて、窓ぐしに見える櫻の花も人も冷たく煙つて見えるのだった。

成程、今日は修二が休んでゐたので、昨夜は少年囚として、留置場でおどかされたのだ。可哀さまに、私の不徹底な取締りが、彼を苦しめてゐる時、私はたまたま、苦しい寂しさを感した。

『その時翁(中井啓所氏)は義子新家孝正氏の座敷に自分を延きたるを、文庫の印を模したるものを出して示された。』

『十三日、丁卯、右大將家法華堂前人家、丁卯、陸奥掃部助幸在其中。』
とある。他は文永七年で、群書類に於ては、同書成書以前に

『金澤文庫の創立者たる北條實時が、度々火災に逢つたといふことは事實である。確實な記録に残されてゐるものが二つある。一は寶治元年で、吾妻鏡の同年正月の條に、

校に教鞭をとる身となつてゐた。私が轉任をしてから、其の學校へいつ早く手紙をくれたのは、修二でした。それは、こんなことが鉛筆で書かれてゐました。

四月十九日 修二より
山本先生
此の手紙は、誰から貰つたよりも私にとつては一番嬉しいかつた。私は早速ペンを持つて、

『その時翁(中井啓所氏)は義子新家孝正氏の座敷に自分を延きたるを、文庫の印を模したるものを出して示された。』

『十三日、丁卯、右大將家法華堂前人家、丁卯、陸奥掃部助幸在其中。』
とある。他は文永七年で、群書類に於ては、同書成書以前に

『金澤文庫の創立者たる北條實時が、度々火災に逢つたといふことは事實である。確實な記録に残されてゐるものが二つある。一は寶治元年で、吾妻鏡の同年正月の條に、

『金澤文庫の創立者たる北條實時が、度々火災に逢つたといふことは事實である。確實な記録に残されてゐるものが二つある。一は寶治元年で、吾妻鏡の同年正月の條に、

『その時翁(中井啓所氏)は義子新家孝正氏の座敷に自分を延きたるを、文庫の印を模したるものを出して示された。』

『十三日、丁卯、右大將家法華堂前人家、丁卯、陸奥掃部助幸在其中。』
とある。他は文永七年で、群書類に於ては、同書成書以前に

『金澤文庫の創立者たる北條實時が、度々火災に逢つたといふことは事實である。確實な記録に残されてゐるものが二つある。一は寶治元年で、吾妻鏡の同年正月の條に、

『金澤文庫の創立者たる北條實時が、度々火災に逢つたといふことは事實である。確實な記録に残されてゐるものが二つある。一は寶治元年で、吾妻鏡の同年正月の條に、

『金澤文庫の創立者たる北條實時が、度々火災に逢つたといふことは事實である。確實な記録に残されてゐるものが二つある。一は寶治元年で、吾妻鏡の同年正月の條に、

『金澤文庫の創立者たる北條實時が、度々火災に逢つたといふことは事實である。確實な記録に残されてゐるものが二つある。一は寶治元年で、吾妻鏡の同年正月の條に、

研究

新讀本と綴方(承前)

(尋一初期に於ける綴方) 神師附小 小島忠治

生活發表
(オツカヒ(二二頁-二三頁)學習前)
『オツカヒ』『オツツダイ』についての生活發表、つとめて具體的に誰にも解る様にはつきりと發表すること。
遊びの記述
(デンワソビ(二四頁-二五頁)シャボンダマ(三〇頁-三一頁)學習後)
シャボンダマ、デンワソビ、デンシャゴツコ……等此の頃の遊びについて、その経験を發表せしめ、その一つを選んで記述することに誘導。
自然描寫
(アメガヤミシタ(二八頁)學習後)
梅雨、雨上り、虹の橋、山の景……等自然に着眼せしめ、その推移の事實を研究せしめ、その美感を口頭にて發表せしめ更にそれを記述させる。
短文創作
トウトウ、ヨツテ、ワツト、プウト、クルクル……等今迄に習つた語を用ひて短文を作る。
動物描寫
(カヘル(二六頁)デンデンムシ(二七頁)メダカ(二九頁)ホテル(三二頁)ヒゴイ(四四頁))
蛙、蝸牛、目高、鮎、金魚、鯉、蜂、蟻、燕、フクロウ……等此頃の生物につ



花園への道 (1)

鳳山生

一、過去の夢は戯曲「龍樹」

カサコソと落葉を踏んで雑木林を出てしまつた桂子は、晴れ渡る秋空に、クツキリと聳え立つ武州の山々を背景にして、見はるかす野原の末に和やかに波うつ赤煉瓦の建物を見てハッと歩みを停めた。

武蔵境高等女学校！

一方には、名譽校長徳川夫人のなみ／＼ならぬ値遇……一方には、學校關係者の度しがたき不信……

桂子は、今、のしか／＼つて来る重擔に喘ぎつゝあるのだ。

徳川夫人の知己の一言に感して、三崎城ヶ島の海南莊を起つたとは云ふものゝ過去に於ける藝術の世界を夢にして徳川夫人の歐米漫遊の留守をあげかり、年齢ややく二十七の自分が、果して難局の上立つ私立高女の創業を爲し終せるか否かは、今もなほ桂子には疑問なのである。

しかしながら、大死一番しめた自分に、大活を現前せしめてくれた徳川夫人の熱誠を思へば、たとへ骨を挫き、身を醫にしても、夫人の志に酬いねばならない……桂子は其の大きな美しい眼を睜つて、彼の難局の象徴の如き赤煉瓦の凝視しながら、林の末の切株に腰を下した。

秋とは云へど、ウソ寒い武蔵野の朝風をいたみ、彼女は銀色のオーヴァの襟を立てると眞白な顔を其の中に埋めたのである。

桂子の前には、数日前、横濱埠頭に、暫くの別離を惜しんだ徳川夫人が俯に立つた。

が、それが消えると、忽ち見ゆ波濤洶湧の大海原……

椿咲く島、女人の島、桂子は、直に八丈島のイリュージョンに提はれた。

彼女は、十九の年に、東京府立の第三高女を卒業し、其の年直に、國語の文検を通過し、教授として、私立の左久良高女に招聘せられたのであるが、数年の後、胸の病を患ひ、職を退いて八丈に遊んだ時、計らずも、同じ病を以て此の島に悠々自適してゐた戯曲の大家遠野三郎氏と宿を相隣した。

彼と彼女との相識……結婚人々は、此の結合から、むしろ、更生されるであらう二人の健康を祝福したのである。

其の後の桂子は、實に幸福そのものやうであつた。

遠野氏が目黒の本邸に發表した「黎明アジア」は、文字通り世界の劇壇を風靡し、嵐の如き賞讃は、彼の身をいやちここに光被したが、元より桂子も、良人のエクスタシーの中に輝がすにはあなかつた。

況んや、遠野氏が、桂子に對する純眞の愛！彼女も程な藝術の世界に目覺め、良人の指導に従ひ、自分の國語の力を利用して、切りに、戯曲の習作に勵むやうになつた。

が、運命は永く桂子に幸せず満二歳にして遠野氏は、再び二疊の胃すところとなり、其の本邸を棄て、城ヶ島の海南莊の病床に、肺患の身を輾轉するやうになつたのである。

かくして半歳、三十八歳を一期として彼は終に不歸の客となつた。

「オ、桂子……死にたくない。死にたくない……僕にはまだ爲さねばならぬ仕事がある……爲さねばならぬ仕事がある……仕事がある……」

と、血を吐く聲に絶叫しながら、桂子の手を握つたまま逝つた良人の遺業！

「爲さねばならぬ仕事がある……爲さねばならぬ仕事がある……」

遠野氏が、五臟六腑をふり絞つて叫んだ最期の言葉。

それは彼が、最も得意とする、材を印度にとつた戯曲の「大乘」といふ三大部曲の最後の作「龍樹」の書き未了を指したのに違ひなかつた。

桂子には、良人の、悲痛な臨終に思ひ至ると、如何しても自ら筆を取つて「龍樹」を完成しなければならぬと覺悟した。

桂子は、良人の葬送がすむと、眞黒な喪服に身を一つし、涙をかくして自ら歸郷し、亡き人の机に凭つた。

彼女が、先づ「龍樹」について研究し始めた。

第二の釋尊と稱へらるる大乘佛敎創始者の龍樹！大智度論、十住毘婆沙論、中論、十二門論、菩提心資精論等、所謂千部の論主である印度の此の大野を研めれば研める程、桂子は唯呆然たらざるを得なかつた。

彼の風采、彼の思想、彼の事業……

桂子は、到底「龍樹」の深淵に捕へてこれを、亡き人の理想の如く戯曲にあらはすことは出来ないと思ひ始めた。

良人との天才の相違、睿智の差、彼女は其の時も煩悶したので。

翻つて、良人の最期に思ひ至れば、たとへ生命を抛つて、彼の作を完成せしめなければならぬ……

彼女は夢中になつて、良人の遺して行つた戯曲「龍樹」の未定稿を貪り讀んだ。

桂子は、殆んど、其の文章を暗誦し、其の場面を眼前に展開することが出来るやうになつてゐた。

切株に腰を下してゐる桂子の幻影は、今、亡き人の戯曲の未定稿に移つて行くのだつた。

戯曲 龍樹 第一場

北印度五河地方ガングラ國都ジャランダーラのヤンド・カニタ王宮殿

奥の方に、下手本殿から上手對の屋に續く長廊下を拵へ、中央に階段……此の階段も長廊も、彫刻のある圓柱をあしらひ、建物のすべてが、希臘印度式の、極めて莊嚴のものなることを髣髴させる奥から舞臺上に掛けて一面の廣庭。

上手に一本、巨大な菩提樹の枯れ／＼のものを植ゑて置く。

背景は下手の方遠く、本殿と、それに續く園林と秋の空高く星が輝いてゐる。

幕開くと同時に、其の篝火がや／＼暗くなり、黒装束のもの一人、通り魔のやうに、廣庭を、下手から上手へ通りぬける。

宮女數人（成人にも可なり長し、各々美しい羅衣の袴を曳き燈籠を手にしてゐる）上手對の屋から登場。

長廊下にかゝると、すべて物に怖ぢたるこなし。各々燈籠を以つて、切り四邊を輝しながら、下手本殿へ退場。

屋根の寶鈴の音が、靜に聞える。

ト、ガングラ國王、チヤンド・カニタ王（三十歳、長し、高貴なれども憂鬱の面帶びて、侍童（扮装適宜、寶瓶を伴うて、下手庭から登場。

ツカ／＼と菩提樹の近くに進み、侍童に寶瓶を置くことを命じ、右手を上げて侍童を去らしめ、尚ほズツと大樹の前に寄り、ジツと梢を見上げ、

を曇らせながら合掌禮を上げ、大地の寶瓶を取り、乳酢を其の根に灑ぎ、寶瓶を置き、樹に向つて再び禮拜

獨白 釋迦牟尼が成道の聖地たるブダガヤより、父、迦膩色伽大王が、此のガングラの王庭に移し植ゑられた大菩提樹……わしの幼い時から、仰ぎ慕うてゐる聖木……此の程までは、泰々と繁り榮えて、蟻では星斗を突かう程に、佛陀の流風、父陛下の餘韻、わしの生命と拜んでゐたものを、何奴の所爲とも知れず、熱鐵を根に注ぎ入れて、枯々にして了つた……今、我國の飢饉も恐ろしく、此の樹を生かすには是置かぬ。南無釋迦牟尼佛……

王、一心に大樹を禮拜してゐる。

王「サラーナタ……人間は、所謂、肉……身體のみで生きてゐるのではない……そなたの器量を持ちながら、何故早う佛陀の聖經を讀まぬのぢや、世尊の御教へに耳を傾けぬ。なうサラーナタ、そなたにも定めて聞いたであらう。今、全五河の民衆は、塗炭の苦に沈淪してゐる。これを救ふの道を講ずるが帝者の仕事……そなたも、少しは、王妹を見習ひ、わしを助けてくれまいか」

王妃「上……上……上……えい、陛下と御呼び申上げて居りますのに……」

王「サラーナタか」

王妃「サラーナタかでは御座りませぬ。今宵も、最早や初夜過ぎました。いつまでも、さうした菩提樹のそばを遊ばさず、早う御寢あそばしませ」

王、一旦、王妃を見、又菩提樹の方へ向き、聲丈け王妃に、

王「そなたは構はず寝まるゝが可い」

王妃、黙つて唇を噛む

王「サラーナタ、わしは、此の菩提樹の生ぎぬ限りは安らかに枕を高くすること出来ぬ。殊更王妹サラーナタは、高貴の身を雨露に暴して、蒼生の救助に辱もこれ足らぬ今日此の頃、やはらかに梅の上は勿體ない」

王妃（怒めしきやうに）今にして思へば、御勇カニシカ大王様が恨めしい。五天竺を席捲したあの御勢で、わらはをコーサラの王室から、陛下の爲めに、ガングラに御下りなされたから十有二年、人には印度一の果報者と謳はれながら、長の年月陛下の御心とはうらはらに……

と、云ひさして、又ジツと唇を噛む。

王「サラーナタ……人間は、所謂、肉……身體のみで生きてゐるのではない……そなたの器量を持ちながら、何故早う佛陀の聖經を讀まぬのぢや、世尊の御教へに耳を傾けぬ。なうサラーナタ、そなたにも定めて聞いたであらう。今、全五河の民衆は、塗炭の苦に沈淪してゐる。これを救ふの道を講ずるが帝者の仕事……そなたも、少しは、王妹を見習ひ、わしを助けてくれまいか」

王妃「上……上……上……えい、陛下と御呼び申上げて居りますのに……」

王「サラーナタか」

王妃「サラーナタかでは御座りませぬ。今宵も、最早や初夜過ぎました。いつまでも、さうした菩提樹のそばを遊ばさず、早う御寢あそばしませ」

王、一旦、王妃を見、又菩提樹の方へ向き、聲丈け王妃に、

王「そなたは構はず寝まるゝが可い」

王妃、黙つて唇を噛む

王「サラーナタ、わしは、此の菩提樹の生ぎぬ限りは安らかに枕を高くすること出来ぬ。殊更王妹サラーナタは、高貴の身を雨露に暴して、蒼生の救助に辱もこれ足らぬ今日此の頃、やはらかに梅の上は勿體ない」

それまでは、そなた一人です」

王妃「ホ、ホ、其の菩提樹は此の五河の一萬一千五百の河々が、開の聲を揚げて山々の方へ逆流れ上らうとも……上……再び繁ることはないで御座います。わらはが嫉ましさに枯らせたのぢや」

王「何と」

と、氣色ばむ。

王妃「コーサラにゐた時も、此のガングラへ嫁いでからも、妖艶無双と謳はれたわらはぢや、すべての人の魂を奪うて来たサラーナタぢや、それを、上にばかりは見もかへられず……やはか此のまゝにはと思ふ一念がわらはの容色を衰へさせ、わらはの心を鬼にした。わらはは、鐵を火にかけて溶解し、其の灼熱したドロ／＼を、其の根に注ぎ込んだ。ホ、ホ、釋迦牟尼の世尊の御の當るものならば、わらはの手は疾りに曲つて了つた筈ぢや」

王、顔色を變へ、キツとなつて、階段近くに詰め寄る。

王妃「オ、御怒りあそばせ、と、サラーナタ階段を走り下り、王の傍にすり寄り、聲をあけて泣く。

王、持て餘した氣味、

唯ジツと王妃を見下してゐる。

ト、篝火一度に暗くなり、枯々の菩提樹に、頻りに風が渡る。

此時、王妃、突如、

「ア」

と叫んで、後に髪を引かす……こなし……仰向いたまひ、右手に我が頭を抑へ何者にか引き摺られて行く心持で、ズル／＼と階段を後様に上る。

暫くして、王妃の體抱へられた形のまま、宙に浮いて、長廊下を上手對の屋へ行く。

王、劍を抜じつゝ、其の後を追ふ。

× ×

落葉を激しく踏む音が後に聞えて、桂子の幻影はハタと消えた。

「あゝやつぱり先生でした、遠野先生」

桂子は、姓を呼ばれたので我に返り、身じまひを正して立ち上つた。

「オ、江川さん」

彼女は、小倉の詰襟の聰明らしい青年と、其の愛犬ジョンとを、微笑を以つて迎へるのだつた。

「サア先生、御一緒に學校へ参りませう」

青年江川浩は、ジョンの頭を撫でながら、案内格で、桂子より先に立つた。

さき頃青調査問の時のこと、高津實科高女の三年生三拾名が執銃教練「廻れ右ッ」で漂々しい動作流石の査問官を感服させたといふから正しく女性非常時戦線のトツプであらう。

借金を楽しんでのお婿入り

所は鎌倉郡中田、借金のある家に行きたい念願が叶つての婿殿「一體借財はどの位ですか」と先づ養父に訊ねた。二千圓？お老爺さんまだモチ……二千數百圓と分かつてから婿殿の奮闘實に十三年今に至つて家道更生とある。

これは非常時農村の一佳話として今時青年の間に傳へられてゐること。

女性の非常時戦線トツプ

女性の非常時戦線トツプ



伊勢原尋常高等小學校

手工科巡回指導

斷然群を抜く成績は 全職員努力の結晶

指導講師杉山甚一先生指導の下に十月二十日行はれた伊勢原小學校手工科研究発表會當日は、隣接學校と違きは三浦足柄等の郡外參觀人を交へて五拾餘名、この種の會合には驚くべき盛況を示した。

この発表會を前にした同校職員諸君の努力は大したもので今春以降研究に一層の力をかけ、他府縣小學校の視察と相互の實地研究授業に七月は放課後、更に夏季休業時を參りて工品や陳列戸棚の製作に至るまで手を延ばしての大車輪、先づ教師自ら勤勉努力の精神を體驗してかゝると共に參考物不買主義の方針を如實に夏休中朝から晩まで詰め切つての、九

「緑人會」の展覽會

スポーツと共に秋を華やかに彩るものは美術の催である。我が橋樹郡の教育者中同好の士が組織してある緑人會では、かねてから作品の智識及び技術の向上を圖ると共に、圖畫教育の爲に努力しつゝあつたが十一月三、四、五日の三日間、高津町役場樓上に第一回の作品展覽會を開催した。

陳列作品は同人の力作及び各小學校より出品された児童作であるが、何れも優秀な出来で中にも猪瀬、田中、加藤君の静物風景、内田、古川君の風景湖の人物、片瀬君の静物、山崎君の花鳥等は素

神奈川高女展覽會

十一月三、四、五日

市四年中行事の一として港北の秋を飾る同展覽會は秋晴に恵まれて三日間に三萬人の觀衆を集めたといふ事である。先づ絡繹たる見物人、交り交り登つて門に入る

三四人居て時々庭内の運轉を始めから觀衆が蟻の様に集つてゐる校内に入ると、第一が總覽室で此處に最近寄贈されたといふ三宅博士の眞鶴港の大水彩畫がある。國語室には「海の生める文學」女流文學者の研究」と題して、景色や肖像入りの作文がある。地理歴史室には海陸模型が澤山出でゐる。室には海陸模型が澤山出でゐる。室には海陸模型が澤山出でゐる。

先づ人の目を驚かしたは仙臺侯伊達伯爵の大名行列である。お駕籠は實際年間紀州侯から伊達宗村侯に入内した温子のもので、極彩色で、内面に四條流の密畫があつた。金碧燦爛の位の費用がかつた。

曹達會社の液體酸素の實驗は目新しく、大小種々の燈臺が大燭光を出して轉回するもの面白い。瓦斯局では數百圓の豫算で室内に風呂場茶の間を作り局長以下盛に活動して居られた。

夏。學。習。帖。整理後の所感を。本年の夏季學習帖整理後に於いて、學習帖の改善改良について思ひ付かれた所あれば御教示願ひたい旨、學習帖配布と共に廣告いたしました。集つては居ますが、尙、本月末迄の期間で今一應御催促申上げてみます。

佛蘭西語學傳習所 慶應二年十一月初旬、横濱海邊通二丁目(今の元濱町四丁目の邊)に、佛蘭西語傳習所が設置された。設立者は稲葉美濃守で、教師には佛蘭西語傳習所長のメルメが當つた。明治二年(或は三年ともいふ)廢校。

外人經營の英語塾 文久二年十一月、横濱に住宅を構へた、米國醫學博士ヘボンが、問もなく其居宅内に家塾を開き、夫人を助手として最初は女子に英語及刺繍、裁縫等を教授したが、やがて男子の入学をも許したので、幕府は九名の生徒を送つて其教育を託した。今の高橋大蔵大臣は實にこの塾に學んだ一人であるといふことだ。又この門よりは、沼間守一、服部綾雄、益田孝、三宅秀、林重などの名士を輩出した。數年の後其男子部を東京に移した。今の明治學院が其後身である。女子部もまたメレー、キダ女史の家塾に譲つた。今のフェリス女學校は其學統をつぐものである。

メレー・キダ女史の英語塾 明治三年九月、米國改革教會から派遣された宣教師メレー・キダ女史(後メレー・イミロル夫人)は横濱に構へた小さな一戸に於て、自ら日本語を學ぶの傍、家塾を開いて毎日三時間づつ英語の教授を始めた。最初は極めて微々たるものでヘボン夫人から譲られた塾生四人を併せて、其年の終りまでに僅かに六人を收容したに過ぎなかつたが、これが抑々日本女子新教育の萌芽であり、曉鐘の第一聲であつたといはれる。序に云ふ、本縣に公立高等女學校の設置を見ること、比較的後れたのは、メレー・キダ女史の女學校を始め、共立、英和其他外人經營の女學校が相次いで起り、盛に本邦の女子教育につとめたので、當時の社會狀態としては其上別に女子高等教育機關設置の必要を感じずに至らなかつたに由るといはれる。さて、女史の家塾は、其次年には急速發展の運が開け、塾生二十二名を數ふるに至つたので夏七月其の塾を伊勢山に移した。當時女史の事業に就て本縣權令大、卓氏が大に好意を寄せられたといふことである。越えて明治七年十一月、女史は政府より無償にて山手居留地に土地を借入れ、米國よりの鎌倉を得たので、外人經營の學校はすべて宗教の基礎の上に立ち、本國より莫大なる資金の支援を受ける便があつたので、立派に經營することが出来たのである。其組織を改め女學校となし、翌八年、校舍の新築を遂げ、六月一日に落成式を舉げた。これが今日のフェリス女學校である。フェリス女學校に就ては、後に改めてまた説くことにする。

日本婦女英學校 一八七一年(明治四年)八月二十八日、米國婦人聯合傳道協會を代表するミス・メリ・ブライン、ミス・ジュリア・エヌ・クロソビー、ミス・ルイゼ・エツチ・ビヤソン三女史が、混血兒及び日本女子教育の爲め、横濱山手四八番にミツシヨンホームを設立した。當時の先覺者で、又英學者として知られた、我中村直正先生は、ホームの由來と、三女史の熱心に感服し、令閨、令嬢を始め、その友達松平某の令嬢を入塾せしめ、大に之を援助されたといふことである。翌一八七二年(明治五年)十月、同所二一三番に移轉し、寄宿舎を設けた。これが本邦に於ける寄宿舎の創始であると云はれる。同年十二月、日本婦女英學校と改稱した。今日の公立女學校は則ち本校である。共立女學校の沿革に就てはまた後に話すことにする。

ブラウン塾に就ては、既にブラウン小傳の中に其一端を述べて置いた。尙少しくそれを敷衍して話して見やうと思ふ。彼が横濱山手二一三番の自邸に家塾を開いたのは、明治六年十二月五日で、學制頒布の後ではあるが、當時學制の拘束を受けぬ外人經營の塾で、前記の諸塾と其類を同するものであるから。それ等と關聯してこゝに説くこととしたのである。 彼はミス・ウイン・アメルマン及び娘のハデイト・ブラウンの補助を得て、英語の發音、作文、習字より始め、英文學史、英國史、米國史、算術、代數、幾何、三角術、地質學、物理學

功勞を賞せられ、勳三等旭日章を賜はり、同年六月十四日彼の母校プリンストン大學より、ドクトル・オブ・ロースの學位を授與したと云ふことである。越えて一九一一年、即ち明治四十四年九月二十一日、彼は滿九十七歳の高齡を以て長逝した。

梅尾東作の英語塾 明治の初年、仙臺の藩士梅尾東作が、横濱野毛山(後に師範學校の敷地となつた邊)に英語塾を開いた。嘗て單騎シベリヤを踏破して雷名を馳せた、彼の福島安正はこの塾の出身者であるといふことだ。明治七年の頃廢止。

外人經營の英語塾 文久二年十一月、横濱に住宅を構へた、米國醫學博士ヘボンが、問もなく其居宅内に家塾を開き、夫人を助手として最初は女子に英語及刺繍、裁縫等を教授したが、やがて男子の入学をも許したので、幕府は九名の生徒を送つて其教育を託した。今の高橋大蔵大臣は實にこの塾に學んだ一人であるといふことだ。又この門よりは、沼間守一、服部綾雄、益田孝、三宅秀、林重などの名士を輩出した。數年の後其男子部を東京に移した。今の明治學院が其後身である。女子部もまたメレー、キダ女史の家塾に譲つた。今のフェリス女學校は其學統をつぐものである。

梅尾東作の英語塾 明治の初年、仙臺の藩士梅尾東作が、横濱野毛山(後に師範學校の敷地となつた邊)に英語塾を開いた。嘗て單騎シベリヤを踏破して雷名を馳せた、彼の福島安正はこの塾の出身者であるといふことだ。明治七年の頃廢止。

外人經營の英語塾 文久二年十一月、横濱に住宅を構へた、米國醫學博士ヘボンが、問もなく其居宅内に家塾を開き、夫人を助手として最初は女子に英語及刺繍、裁縫等を教授したが、やがて男子の入学をも許したので、幕府は九名の生徒を送つて其教育を託した。今の高橋大蔵大臣は實にこの塾に學んだ一人であるといふことだ。又この門よりは、沼間守一、服部綾雄、益田孝、三宅秀、林重などの名士を輩出した。數年の後其男子部を東京に移した。今の明治學院が其後身である。女子部もまたメレー、キダ女史の家塾に譲つた。今のフェリス女學校は其學統をつぐものである。

學務課 ニューズ

○十月十八日

滿鮮の視察から歸つた小山社會教育主事挨拶に来る。

「キーサン學校と云ふのを視ましたが、内地の藝者のやうな無定見なものでもなく、あれは立派な社會教育者だ」とはオヤ／＼か

「あれは特別にお金を出して下から拜ませたのでありますが、極彩色で雄大なものさ」

「夏は薄物を透して繪とは言ひながら女の地肌がまるでね……」

「同ナール程ね……と頭を寄せながら」

○廿五日

○官吏教員三十四名の勳章傳達式、學務課では森屋視學勳八等に叙せらる、課内での帶動者を六等の今井技師、八等の齋藤書記、官吏の叙勳者いと稀である、ありさうでまだないのが課長と視學官、森屋さん處女の如く、はにかみ、「皆様の御指導よろしきを得ました」

「ほんの……何ですが……お茶でも入れて下さい」流石の川島ギヤング君聊か面喰ひ、

○三十日

關野氏の表彰狀傳達式が、廳内の部長室で行はれる、午前十時とふに先づ課長、視學官、視學及

懸賞文藝作品大募集

- 1 小説と戯曲
2 童話と童劇
一、二百字詰原稿紙二十枚乃至三十枚
内容制限ナシ
ハ、楷書ニテ認メ漢字ニハ假名ヲ振ルコト
ニ、雅號、匿名可

- 懸賞 一等 金貳拾圓 各一名
二等 金拾五圓 各一名
三等 金五圓 各二名
選評者 (依頼中)

- 1 新詩
2 短歌
一、隨意題詠
ロ、毎題用紙別ニスルコト
ハ、雅號、匿名可

- 懸賞 一等 各一名
二等 各一名
三等 各三名
選評者 正富洋先生

- 三、俳句
一、春季雜詠
ロ、五句吐
ハ、用紙ハ官製ハガキ、縦書
ニ、雅號、匿名可

- 懸賞 三光 粗景(萬年筆)呈上
五客 綠庵紅一宗匠
選評者 太白堂滄洲宗匠 綠庵紅一宗匠

- 一、切
二、發表
三、宛所
昭和九年一月十日發行本紙
俳句ハ川崎市役所井汲勝雄宛
其餘ハ縣廳内教育會事務所
時報編輯係宛「原稿在中」封ガキノ事

及び神學に涉つて教授した。學生は數十名に及び、其中よりは胸井重格、島田三郎、前田侯爵、井深繩之助の如き名士が出た

外國語學傳習の道が開けたと同時に、他の一方にはまた漢學

慶應二年正月、横濱勤務の役人の子弟に、漢學を教授する目

是横濱ニ學館アル始ナリ。修文館ノ額ハ、一橋支同公ニ乞ヒ

明治元年十一月、神奈川縣裁判所(今の縣廳の前身)の役人の

維新の際、前掲の英學校と共に一旦廢止の運命に歸したが、

市學校は一に高島學校と唱へ、又藍田堂と稱した。高島嘉右

市學校は一に高島學校と唱へ、又藍田堂と稱した。高島嘉右

市學校は一に高島學校と唱へ、又藍田堂と稱した。高島嘉右

人教師三名を備へ、通稱・商業の二科を主として開校した。

當時同校取締の川村敬三が専ら之を斡旋したと云はれる。明治

附記。明治二十二年發行の神奈川縣立會第二回報告(譯小

本校ハ明治九年七月、高島嘉右衛門氏創立ノ英語專門學校

市學校之儀ニ付奉申上候書付

神奈川縣權令大江卓殿

千五百圓 三井八郎右衛門

二百五十圓 小野善三郎後見

市學校は一に高島學校と唱へ、又藍田堂と稱した。高島嘉右